

parjurer からディドロ、『ラモーの甥』、pourvu que まで

1. parjurer とラテン語 per-

jurer「誓う」に対し、se parjurer は「偽誓する / 誓いに背く」。ただし「par- を付ければ反対語になる」という規則はない。parjurer はラテン語 perjurare に由来し、この par- は接頭辞 per- に遡る。per- の中心イメージは「貫いて・最後まで・徹底的に」。そこから貫通、完遂、強調、範囲を越える・逸脱する、といった意味が派生した。英語 perjury「偽証」も同系。

per-/par- を含む語

語	意味	per- のイメージ
parjurer	偽誓する / 誓いに背く	誓いからの逸脱
parfaire	完成させる	最後まで行う
parcourir	巡る・走破する・目を通す	全体を通り抜ける
perforer	穴を開ける	貫通
persister	持続する・固執する	徹底して続く

parcourir は courir「走る」から「ある範囲を端から端まで通る」方向へ発達し、parcourir la France「フランス各地を巡る」、parcourir un livre「本にざっと目を通す」。parfaire は faire「する・作る」から「最後まで完全に作る」→「完成させる」。ただし par- を持つ語をすべて機械的に per- + 語根と分解できるわけではない。

2. ディドロの思想

ドゥニ・ディドロ（1713-1784）を大づかみに言えば、「神や既成の権威ではなく、自然と人間の経験から世界を理解し、自由に考え続ける」思想家。完成した体系を提示するより、対話・仮説・矛盾を使って思考を動かす。

唯物論・自然主義：精神と物質を完全に分けず、生命・感覚・思考も自然＝物質の働きから生じうると考える。自然は固定的な機械ではなく、変化し新しい性質を生む動的なもの。

宗教・権威批判：神や教会を道徳・秩序の当然の根拠とせず、人間と自然から考え直す。『百科全書』も知識を権威の独占から解放する啓蒙の実践。

経験・科学：観察、経験、医学、生物学を重視。

道徳・人間観：善悪を神の命令だけでなく、人間の身体・社会・共存から考え、性格や行動が身体、環境、教育、経験によって形成される問題にも踏み込む。

3. 『ラモーの甥』

事件中心の小説ではなく、基本的に MOI（私）と LUI（ラモーの甥）の二人による長い対話。パリで出会った二人が、金、道徳、才能、芸術、教育、幸福、へつらい、悪徳などを論じる。甥は音楽に通じながら安定した地位を持たず、金持ちの家で食客・道化のように暮らしてきた人物として描かれる。

独白ではない。ただし MOI の短い問いや反論をきっかけに LUI が長くしゃべり、逸話・皮肉・物真似・パントマイムへ展開することが多い。そのため「甥の長大な独演」のようにも感じられる。形式は 哲学的対話 + 独演 + 演劇 + 社会風刺。

4. 『ラモアの甥』の核心とヘーゲル

甥は嘘つき・寄生者・道化・不道德な人物でありながら、自分の卑しさも、自分を養う上流社会の偽善も理解している。社会では善良さより金・権力・迎合が成功につながることを暴露するため、単純に「MOI = 善、LUI = 悪」とは整理できない。社会の腐敗の産物であると同時に、その腐敗を最も鋭く語る批評家でもある。

ヘーゲルは『精神現象学』（1807）の「疎外された精神」の文脈でこの作品を重視した。甥は社会に適応しながら社会を嘲笑し、自分を肯定しながら自分を軽蔑する。この分裂した／引き裂かれた意識が近代的疎外を鮮やかに表す。

さらに甥の言葉では、「立派さ」の背後に迎合があり、「芸術」が商品となり、「道德」が社会的無力さにつながるなど、価値がその反対側を露呈する。単純化すれば $A \rightarrow A$ の内部に $\text{not-}A \rightarrow A$ の自己否定・変容という運動で、ディドロは弁証法を体系化してはいないが、文学的対話として価値の自己反転を演じさせている、と読める。

『ラモアの甥』はディドロ存命中には刊行されず、ゲーテのドイツ語訳が1805年、ヘーゲル『精神現象学』が1807年。ディドロ → ゲーテ → ヘーゲルという知的連鎖があり、疎外や社会的矛盾という問題は後のマルクスにも接続していく。

5. pourvu que — 条件・留保・願望

pourvu que + 接続法 の基本は「～という条件さえ満たされれば」。日本語で「ただし」と訳せるため逆接らしく見えるが、論理的には条件による留保である。

A, pourvu que B = A は認める。ただし B が条件。

Tu peux faire ce que tu veux, pourvu que tu sois prudent.

「慎重でさえあれば、好きなようにしていい。」

mais との違い：Il peut venir, mais il doit être prudent. 「来てもいい。しかし慎重でなければならない」→ 対比・逆接。

Il peut venir, pourvu qu'il soit prudent. 「慎重でありさえすれば来てもいい」→ 条件・留保。

à condition que は比較的中立的な「～という条件で」。pourvu que

は「その一点さえ満たされれば他は構わない」というニュアンスが出やすい。

Je lui pardonnerai, pourvu qu'il dise la vérité. 「本当のことを言いさえすれば、彼を許そう。」

願望用法：独立的に使うと「～でありさえすればいい」から「どうか～でありますように」へ広がる。

Pourvu qu'il vienne ! 「彼が来てくれればいいんだけど！」 Pourvu qu'il ne pleuve pas ! 「雨が降らなければいいな！」

全体をつなぐポイント

parjurer の par- を単純に「反対」、pourvu que を単純に「逆接」と決めつけないのと同じく、ディドロや『ラモアの甥』でも善／悪、道德／不道德といった固定的な二項対立が揺さぶられる。語源・文法・哲学のいずれでも、ラベルより「意味や価値が文脈の中でどう動くか」を見ることが理解の鍵になる。